

<研究ノート>

第一次世界大戦とフランス音楽
 — 2019年度シンポジウム「第一次大戦後の音楽史」に寄せて
La Grande guerre et la musique française :
Notes pour le Colloque «L'Histoire de la musique après la Première Guerre Mondiale»

友利 修
TOMORI Osamu

2014年～2018年のフランスにおける第一次大戦百年記念、そこでの音楽の位置づけ、音楽学の研究動向を紹介しながら、フランス音楽史に第一次世界大戦がもたらしたものについて考察した。1870～71年の普仏戦争以降の歴史の中で、同時代の音楽史記述とともに概観する。1914～1918年の戦争は、フランス音楽史における大転換点、出発点というよりも、むしろ、1870年以来、連続してきたフランス独自の音楽文化の確立の努力が、半世紀のひとくぎりとして認識されることになるきっかけと見るべきだろう。そして、第一次大戦後のフランスは、国際的な文化の中心地として、新旧の要素の共存する様々な潮流を発展させることとなる。第二次大戦後、西洋音楽史の中での前衛史観の中で、その多様性が忘却されてしまったが、これからの音楽を考える上で、この時期を見直すことはまた必要ではないか。

キーワード：第一次世界大戦、普仏戦争、フランス音楽、前衛

はじめに

筆者は、2019年度の国立音楽大学個人研究費（特別支給）を研究課題「現代音楽史における第一次大戦の影響についての考察 — 20世紀音楽史再考と21世紀音楽の可能性のために — 」により受け、その一環として、二人の学外共同研究者、沼野雄司（桐朋学園大学）、中川航（春秋社）とともに、2019年9月7日に学内の6号館110スタジオにおいて、「第一次大戦後の音楽史」と題するシンポジウムを開催した。

当日は以下に示すように4人のパネリストの発表と、このシンポジウムのために企画構成された歌曲の演奏会、フロアからの参加者を含むディスカッションによって進められた。

- 友利修（国立音楽大学）「なぜ今第一次大戦後の状況に目を向けるのか」
- パネル1 沼野雄司（桐朋学園大学）「両大戦間のアメリカ音楽：ニューディール期の音楽政策」
- パネル2 芳賀直子（舞踊史研究家）「ベル・エポック終焉後のバレエ・リュスを中心に」
- パネル3 神部智（茨城大学）「旧秩序の崩壊と国民音楽文化の形成：シベリウスとフィンランド」
- パネル4 伊東信宏（大阪大学）「1920年代のハンガリー：解放と閉塞の交錯」
- 演奏 F. プーランクとH. ソーゲの歌曲による幕間コンサート シンポジウム「第一次大戦後の音楽史」によせて。
 出演 Jeux Interdits（新福美咲 Sop. 島田樹里 Msop. 新井千晶 Pf.）F. Poulenc 《Cocardes》, H. Sauguet 《Une carte postale》ほか
- ディスカッション 16:45-17:30

各発表者による研究報告、演奏会解説、当日のディスカッションのレポートは、2020年春に予定されていた第2回目のシンポジウム（コロナ感染症の流行の影響により未開催）の分と併わせて別途公表の予定となっており、この研究ノートでは、共同研究計画全体の中で筆者個人の分担部分であるが第1回のシンポジウムで時間枠の

関係で発表できなかった、「第一次大戦とフランス音楽」の主題についての考察を、問題の整理、今後の研究の指針としてまとめたものを提示する。

1. フランスにおける第一次世界大戦百年祭と音楽、音楽学

そもそも、第一次世界大戦について歴史的研究に関心がこの数年高まったのは、1914年から1918年まで続いたこの戦争の100年目を私たちが通過していったことによるのは言うまでもない。1914年に、そして1918年には、節目の年として「百年記念」の名が冠せられた行事や、出版企画、演奏会が、この戦争をなんらかの形で経験した各国で数多く行われた。人々がこの100年目をどうやって記念したのか、そこにどのような観点が込められたかについては、これ自体が将来の歴史研究の対象となるだろう。筆者らが企画したシンポジウムも、欧米各国の音楽における第一次世界大戦の意義を問うものであり、特に国・地域ごとの比較により、この歴史的事象の全体像にある程度迫りたいという意図からであった。

フランスだけに絞り「1914～18年」の百年記念がどのように行なわれ、そして、文化領域、特に音楽においてどのような行事が行なわれたかについて、その全貌を調査・分析しようとするれば、概観だけでもやはり少なくとも一編の独立した論文を必要とするだろう。この研究ノートではそのおおまかな傾向を示すためにいくつかの例をあげることにする。

まず指摘すべきは、フランスにおいてはこの「百年祭」の行事が大きな国家事業として行われたことである。

この事業は「第一次世界大戦 1914～1918 百年祭 Centenaire de la Première Guerre Mondiale — 1914-1918」の名のもとに実際の行事だけでも4年間に渡って行なわれた。そのために特別のWebサイト <https://www.centenaire.org> が作られ、この事業に関する様々な情報や行事がそこに集約された。この事業の一環として「Centenaire 百年祭」ロゴの配給を受けた行事は全国そして国外も併わせて4000以上にのぼると、サイトのスケジュールページでは明らかにする (<https://www.centenaire.org/fr/agenda> [accessed on September 15 2020。以下の [centenaire.org](https://www.centenaire.org) の各ページへのアクセスの日付けはすべて同])。

またこの行事のために、「第一次世界大戦 1914～1918 百年祭実行委員会 Mission du centenaire Centenaire de la Première Guerre Mondiale — 1914-1918」が作られたが、2012年4月に設立されたこの組織の設立規約によれば、その構成メンバーとして国防省、文化・通信省、教育省、高等教育・研究省、観光省、内務省といった国家機関をはじめ、アンスティテュ・フランセや国立図書館などの公的な機関が参加している。まさに国を挙げての事業であった。

その中で、音楽を主題とするものでも、コンサート、インターネットサイトの開設、展示会、放送、出版、シンポジウム等々がこの4年間にわたり数多く行なわれた。ここでは典型的なものを、[centenaire.org](https://www.centenaire.org) での紹介ページによってあげる。一つは、「塹壕のチェロ」と呼ばれる戦場での手作りの楽器による演奏会のドキュメント映画 (<https://www.centenaire.org/fr/annonce/le-violoncelle-des-tranches>) である。もう一つはアルザスの演奏グループ *Chambre Folia* が企画制作し、1914年からツアーを行なった演奏会を舞台作品とした「音楽家たちの第一次世界大戦 *La Grande Guerre des Musiciens*」である (<https://www.centenaire.org/fr/autour-de-la-grande-guerre/musique/le-spectacle-la-grande-guerre-des-musiciens>)。前者の紹介ページの表紙には、ヒンデミットと彼の戦友たちが前線で行なった弦楽四重奏の演奏のもようが用いられている。そして、大戦に従軍していた各国の音楽家が以下のように国籍とともに紹介されている — F. クライスラー (オーストリア)、L. デュロゾワール (フランス)、P. ヒンデミット (ドイツ)、M. ラヴェル (フランス)、E. イザイ (ベルギー)、A. ルーセル (フランス)、C. ドビュッシー (フランス)、A. シェーンベルク (オーストリア)、R. V. ウィリアムズ、A. カブレ (フランス)。

この後に紹介する音楽学的研究についての傾向も含め、先取りしてこの2つの演奏会の構成に典型的な2014～2018年開催の記念祭の文化行事、そしてそれと特に音楽とのかかわりにおける、その関心のありかたの傾向について述べれば、次の2つがあげられるだろう。

一つの傾向は、上記の舞台作品で、参戦国の敵味方に関係なく音楽家がとりあげられたことでも示されているように、多くの行事が、独仏和解を軸とするEU統合の価値の確認としての政治的価値を担わされたことである。

もう一つの傾向、戦時の記憶の再生を、具体的なミクロの生活レベルで取り上げる傾向である。また戦場のそれだけでなく「後方」での生活のようすにも関心が向けられた。このことには、従軍兵の生き残りが2008年に死去した後に、もう一度体験の記憶の受け継ぎが、集合的な歴史認識にとって大きな課題となったことが関係している。その、生活レベルでの記憶の再生において、音楽、音楽行為が重要な役割を担うようになった。

フランスで「百年祭」の機会に発表されていく第一次大戦の音楽学研究でも、後者の傾向が反映されている。数多くの、特に戦線での多彩な実証的歴史研究が積み重ねられ、発表されてきた。作業としては戦時の記録の発掘、そして任務としては体験レベルでの記憶の再生・更新である。さらに言うならば、この傾向は、フランスにおける第一次世界大戦研究の泰斗であるJ. - J. ベッカーが指摘する第一次世界大戦研究史の全般における1980年ごろからの潮流、文化史・生活史研究の重視の傾向 (Becker ed. 2005: 5) の延長線上にある。

音楽学におけるその傾向に典型的な成果として、2014年に出版された論集 Maindreville et al., 2014. *La Grande Guerre en musique : Vie et création musicales en France pendant la Première Guerre mondiale*. (『音楽における大戦：第一次世界大戦中のフランスにおける音楽生活と音楽創作』) に収められた論文のタイトルを、以下に訳によって紹介する (執筆者名は割愛)。

第1部：前線における音楽家の生活

- ・ 大戦間の前線の「演奏会」：戦争への参加と余白の芸術生活の間で
- ・ 将軍の五重奏団。前線における或る芸術活動の物質的、精神的条件
- ・ 指揮者の誕生：大戦期のルイ・フレティエ 1914-1925

第2部：大戦中の音楽創作と音楽の美学

- ・ 戦争の中で音楽する：アンドレ・カブレ — ヴィオリスト、ピアニスト、編曲家、作曲家、教育者
- ・ フェルナン・アルファン (1872-1917) フランスに奉仕する一人の音楽家
- ・ 《祈り》：ピエール・ヴェロースの未出版歌曲
- ・ レイナルド・アーン — 戦争中の作曲家：沈静の詩学のために
- ・ アルフレド・ブリュノーの《太鼓》：戦争の音楽と芸術上の闘いの間に
- ・ 音楽形式への大戦の影響：フランス音楽における新しい時間意識へ

第3部：音楽的愛国と後方の文化生活

- ・ オベレッタの看護婦：ミミ・バンソンとその帽章
- ・ 《戦中開封不可》：「神聖な団結」と音楽出版社の動員、1914-1918
- ・ 第一次大戦中のアンジェの音楽生活

こうした研究はいわば、歴史的に遠く離れた場所からミクロ視点での観察を実行するというものである。研究自身は、実証的研究の持つ魅力を湛えており、そして私たちに新しい現実を見せてくれる。しかしながら、「20世紀音楽史再考と21世紀音楽の可能性のために」を目標に掲げる研究の中で、そして日本に住む研究者として、筆者がこの研究計画の中で意識的にとる立場は、それとは一線を画した、100年遠く離れた地点からのマクロの

視点である。一方、この種の考察は、後づけによる恣意的な解釈の落とし穴に陥りがちとなる。それをできるだけ免れるために、同じマクロの視点によるものではあっても、ここでは、フランスの同時代人が記録した歴史的に近くからの観察、すなわち 戦間期・第二次大戦直後の音楽史書、評論を介するという方法をとりたい。

2. フランス音楽史の歴史区分と第一次世界大戦

まず、フランス音楽史における「第一次世界大戦」をマクロな視点で見るときに、「第一次世界大戦はフランスの音楽史で何を変えたのか?」という問いが立てられるだろう。さらにつきつめれば「第一次世界大戦はフランスの音楽史における決定的な切断点か?」という問題である。

第一次世界大戦を研究テーマとし、この出来事に大きな意義を見出そうとするとき、「第一次世界大戦が全てを変えた」、「このできごとが現代のすべての始まりだ」「音楽史においてもそうである」という位置づけをしようとする誘惑は常にある。しかしながら、フランス音楽史の記述を検討していく限り、むしろ、「フランス音楽」として1870・71年の普仏戦争は、第一次世界大戦よりも大きな転回点とみなされることは一般的了解と言ってよい。

それは次のような、時代区分としての1870年を書名に置く音楽史の著作からも伺える。

- ・ V. A. Jules 1966, *L'âge d'or de la musique française (1870–1950)* (『フランス音楽の黄金時代 1870～1950』)
- ・ J.-M. Fauquet 1986, *Les sociétés de musique de chambre à Paris, de la Restauration à 1870* (『パリにおける室内音楽の協会 王政復古から1870年まで』)
- ・ B. François-Sappey 2013, *La musique en France depuis 1870* (『1870年以降のフランス音楽』)

事典的記述で言えば、MGG 第2版で "Frankreich" を担当した、M. Faure もやはり、次のように、1870年を大きな時代区分の点に置く「IV. 17および18世紀 / V. 1870年まで / VI. 1870～1944」(Faure 1995)。その上で1914年は、次のような VI 中の時代下位区分となっている—「1. 1914まで: 1a ワグネルリズム 1b フランス音楽のリヴァイヴァル」 「2. 1914～1944: 2a 明快さの美学 2b 人民戦線の音楽 2c ヴィシー政権下の音楽」(Ibid.)

1918年を大きな切断点とする見解も潜在的には存在はする。しかしそれは、フランス音楽における1870年の切断や、1945年以降の音楽史を視野の外に置いた視点や、フランスでの言説に基づくことの少ない外在的な視点によるものではないか。L. Hamer による、B. Kelly 2013, *Music and Ultra-Modernism in France: A Fragile Consensus, 1913–1939*. への批評中の次の言葉はそれを端的に指摘している。

Barbara L. Kelly の *Music and Ultra-Modernism in France: A Fragile Consensus, 1913–1939* は、大戦間フランスの音楽のモダニズムについての豊かでニュアンスに富んだ調査研究であり、この時代についてこれまで一般的に受け入れられてきた理解に挑戦するものである。音楽のモダニズムについての記述説明は、フランスあるいはフランス以外に焦点を当てたもののいずれも、第一次世界大戦を、世代間に和解不能な分離を作り出した完全な切断の瞬間として押し出す傾向にあった。大戦間という通常の境界に対して、さらに時代を遡って第一次大戦を含めてみる(1913–1939) ことにより、そして、戦前、戦後の両方に盛んに論じられた音楽的・美学的諸問題をとりあげることで、Kelly は戦争の影響についてのこのこれまで堅固に守られてきた見方に説得力のある異論を突きつけている。あらゆる作曲家、評論家、音楽学者が参加した、フランス音楽が向かうべき方向についての議論を調べることにより、Kelly は、第一次大戦の前後にはさらに高次の連続性があること、これまで認められてきた以上に大きな世代間のコンセンサスがあることを示唆した。... (Hamer 2014)

3. 1870・71年と1914～18年と「半世紀」の意識

それでは、1870年の切断とは何を意味し、1914～18年の戦争が変えたものは何だろうか。それは、1870年からの新しい出発・改革の達成をこの戦争が認識させたということにある。それはまた、音楽だけでなく経済・社会・文化一般における認識であり1870年の戦争のあと次第に高まってきた認識が、戦争によって顕在化し、強化されたということにある。

B. Baillar et al. (1916), *Un demi-siècle de la civilisation française* (1870–1915) (『フランス文明の半世紀 (1870～1915)』) は、1916年、戦争中に、様々な分野におけるフランス文明の優位性のプロパガンダのための書かれた本だが、次のように半世紀の歩みへの意識がはっきり宣言されている (Baillar 1916: 10)。

1870年以来、当事者の主張に基づき、人類進歩の中心にはベルリンがあるのみと、人々は信じるようになった。宣伝や、はたりの術のマイスターとして知られるドイツ人たちは、自分たちはよく組織された軍隊を持つだけではなく、あらゆる点において、優れているのだと嫌というほど繰り返してきた。[...] 彼ら (外国人たち) は、一種暗示にかかったように、なにはともあれまず、あらゆる分野において、まずドイツへおうかがいをたて、ドイツの製品を買ひ、ドイツ語の本を読み、ドイツのやり方をまねすることを思うようになった。

フランスは逆の道を歩んだ。フランスは、敗北によって謙虚になり、1870年の廃墟を修復することに努め、それに成功した。財政を、軍隊を、艦隊を作り直した。植民地帝国を築き、それはイギリスに続き、世界一のものとなった。すなわち、アフリカ、アジアの広大な領地の全域において、正義の法を君臨させた。言葉の最も美しい意味において、文明化した。フランスは再び前へと歩み始め、科学、芸術、文学の分野において、同じ期間に他のどの国に見るよりも、より多くの進歩を実現し、より多くの発見を行い、より多くの才能のある人物と素晴らしい作品を生み出した。(…)

現行の戦争は国家間の戦闘以上の意味を持っている。(…) それは二つの対立する原理を露わにした。片方には、他よりも優れ、そのゆえ、いかなることも許されると考えている一つの人種 (race)。そしてもう一方には、自らの独立を守り、地球上で自分たちに与えられた居場所に自由に住まうことを要求する国々である。(1916年4月)

各分野からの20人の執筆者のうち音楽の項は、楽壇の重鎮であったシャルル＝マリー・ヴィドール (1844–1937) が担当している (Widor 1916 in Baillard et al. 1916: 449–469) が、彼の文章では、そのキャッチフレーズのみ先行し、オペラ座やオペラコミック座等の制度の優秀さは強調されるが、音楽創作における半世紀の改革の達成を具体的に示しているとは言いがたい。たとえば1870年以降の歴史の中で言及された音楽家で作品とともに扱われるのはグノーとサン＝サーンスのみであり、以下の音楽家が名前を挙げられているにすぎない — ビゼー、マスネ、フランク、ラロ、ドリーブ、レイエ、デュボワ、フォーレ、シャルパンティエ。また、ドビュッシー、ラヴェルの名は明示的に挙げられていない。明らかにヴィドールはこの時期の創作の新しい傾向の評価に消極的な態度を示している。一方、以下に見るように、この時期の新しい変化を積極的に評価する著述家も現われており、普仏戦争から第一次世界大戦の間にフランス音楽が成し遂げたものが何かについての言説の争いは戦後に持ち越されていくことになる。ヴィドールのこの言説は逆説的に、その内容についての合意を見ないまま、半世紀の到達の意識が浸透していたことを示している。

この「半世紀」の時代意識を反映するように、大戦中から戦後にかけて、フランス音楽の現代史を提示する音楽史書がフランス国内で次いで出版されて行った。これは過去の他の時期には見られない現象である。これらの音楽史書は、いずれも、ドイツを意識しながら1870年の転換点を起点とし、そしてもうすぐ半世紀というところでフランスが音楽の上で何が達成したことを述べる。そしてときには「半世紀」をタイトルに含めている。

例えば、戦争初期の1915年に出版された O. Séré 1915, *Musiciens Français d'aujourd'hui*. では、序文で次のよ

うに述べられる — 「美しい音楽への崇拜や愛好は今日では一つの人種だけの特権ではない。ドイツ人と同じくらい今日のフランス人も、注意深く内省的に音楽の豊かな語りの響きの進行を追うことができる」(7)。「この(現代のフランス音楽の運動)の発展の起点は1870年ごろに置くことができる [...] 本書で以下に紹介するのはこの40年ほどの音楽の概観である」(9)。

Séréの著者を皮切りに、フランスの「現代音楽史」を扱う以下のような書は、いずれもこうした観点をはっきりと打ち出している。

- ・ G. Jean-Aubry 1916, *La musique française d'aujourd'hui*. (序文はフォーレ。第1章に「フランス音楽とドイツ音楽」と題する考察)
- ・ J. Tiersot 1918, *Un demi-siècle de musique française: entre les deux guerres 1870-1917* (1924には *Un demi-siècle de musique française, entre les deux guerres 1870-1919*と改題して出版。)
- ・ A. Coeuroy 1922, *La musique française moderne: quinze musiciens français*.
- ・ R. Dumesnil 1930, *La musique contemporaine en France*.

さらには、次のような著作は、フランス音楽史を17世紀に遡って概観しながら、1870年からの再興期、特にドビュッシーまでを一区切りとする大きな時代区分を提示している。

- ・ P. Lasserre 1917, *L'esprit de la musique française (De Rameau à l'invasion Wagnérienne)*.
- ・ J. Chantavoine 1921, *De Couperin à Debussy*.

戦後になると、「半世紀」のフランス音楽史の本質は何かをめぐっての議論が本格化する。その中で、浮上したのがすでに戦中の1918年に亡くなっていたドビュッシーである。「1870年ごろに始まる動きの真の確立者はドビュッシーである」あるいは「現況の新しい展開はドビュッシーからである」との主張が打ち出され、そこで彼のオペラ《ペレアスとメリザンド》に特権的地位が与えられていく。

特に、戦後新しくスタートした音楽雑誌 *Revue musicale* は1920年12月発行の第2号を、まるまるドビュッシー追悼号とした。巻頭の20頁余りの A. Suarèsの長いドビュッシー論は、半世紀の歴史をもつフランスの同時代音楽史の中心にドビュッシーを据える宣言でもあった。戦後、ドビュッシーの像をどう確立するか、そうして確立した像による正統性に対し自らをどう位置づけるか、1919年以降の音楽家たちの一種の小さな闘争の場となった(cf. Chimènes & Laederich 2013, Kelly 2014)。そしてこのことはフランス音楽とは何かという自己規定と密接に結びついていた。

4. 変わらぬものと新しい要素

こうした1870年以降の音楽家たちにより作られ、戦後はドビュッシーを到達点、出発点として作られたフランス音楽像という場の中でいろいろな世代の音楽家が位置ぎめをしながら活動していく。

両大戦間における同時代のフランス音楽史はおおむね、1870年以降のその時点までの音楽を、そうした枠の中で一つの大きな発展の歴史として描く(例えば、R. Dumesnil 1930, *La musique contemporaine en France*)。その中で、独自の立場を示しているのが、戦後のフランス音楽の新しい方向性を国際的競争の中で強調するために意図的に1918年の断絶を強調しようとした P. Landormy (例えば、Landormy 1943b) であり、第一次大戦後の前衛をめぐる議論そして、「六人組」の美学の積極的評価と結びついている。

しかし、こうした創作側からの観点はあるものの、第一次大戦後のフランスの楽壇は、フランスが「前衛」の

牙城として音楽史をひっぱっていったというような像に還元されるものではない。

まず、音楽市場を支える社会的基盤に関して言えば、聴衆の趣味がゆっくりとしか変わらず、それどころか、戦争などなかったかのごとく、戦前のそれに戻っていったことが観察される。例えば、R. Dumesnil 1946, *La musique française en France entre les deux guerres*. は、演奏会のレパートリーについて次のように記述する。

1922/23のシーズンに管弦楽で最も演奏された曲目は、ワーグナー 334回。ベートーヴェン 139回、サン＝サーンス 111回、フランク 98回、リムスキー・コルサコフ 81回、モーツァルト 76回、ベルリオーズ 62回、メンデルスゾーン 55回、ドビュッシー 53回、シューベルト、リスト、デュカ、ダンディ、シューマン、ヴェーバー、フォーレ、バッハ、シャブリエ、ルーセル、ストラヴィンスキー、シュミット、ケクラン、R. シュトラウス、プレヴィル、カブレ、オネゲル、ミヨー、ロジェ＝デュカス...

15年後：ワーグナー、ベートーヴェンが同位で首位。ドビュッシー、フォーレ、ラヴェル、デュカ、シュミット、ルーセル、ロバルツもよい位置を占めるが、ダンディだけは意図的な陰謀による無視されている。劇場においてもワーグナーの上演回数が最も多く、収益も最もよい。

上記の演奏レパートリーから分かるように、戦争中の熱気にかき立てられたような反ドイツ機運は急速に静まって行った。戦後の音楽論壇を牽引することになる *Revue musicale* 第1号（1920年11月1日）の誌面を子細に読んでも、2年前に終わった戦争に関する宣言やそれどころか戦争が存在したことを伺わせる記述はほとんどない。そこで、ドイツ軍に殺されたアルベリック・マニャールについての論文“L'esthétique d'Albéric Magnard” (Laforêt 1920 in *Revue musicale*, no. 1: 28-33) を掲載しているのには明らかに象徴的意味があるが、彼の死と戦争とのかかわりについては沈黙している。この号では、フランスからの音楽時報における「過去5年パリの聴衆が音楽を奪われていたことは周知のことである。空腹を抑えるのにせいっぱいだった。」が戦争についての唯一の暗示的記述であり、ベルリンからの音楽時報においては、「戦争にもかかわらず、ベルリンは世界の主要な音楽都市の地位を守った。」と好意的な言辭が用いられている。

戦中に排斥運動までおきた、ワーグナーへの興味は衰えず、戦中の欠を埋めるかのように再評価が成されていく。1921年1月5日には《ワルキューレ》でワーグナーが上演復活し、*Revue musicale* は1923年10月号を「ワーグナーとフランス Wagner et la France」と題するワーグナー特集号にあてた。

一方、戦後に新しく出現した現象や議論を、音楽雑誌や当時の新聞等で追っていくと、章を改めて後述する、前衛の地位をめぐる争い、国際的な音楽場としてのフランスの確立という主題の他に、ラジオや録音といった新しいメディアの登場と聴取モードの変化、電子楽器といった主題に興味を持たれていくことが見てとれる。また、見落してならないのは、戦後、慰藉へ向かう精神が多くの宗教的内容の創作となって現出したことである。しかし、第三共和制のイデオロギーである非宗教を重視する立場と、教会による信仰を旨とする立場との緊張関係の中で、これらの創作の位置付けは複雑な様相を呈していた。このジャンルは、両大戦間の音楽についての前衛中心的主義的な研究やレパートリー発掘の中では、これまであまり注目されなかった分野である (cf. S. Caron 2009, *Musique, art et religion dans l'entre-deux-guerres*.)。

5. 新しい時代の表象と多様性の中の暫定的安定

第一次世界大戦後の「前衛」の立場・路線をめぐる争いは、両大戦間の音楽史において最もクローズアップされる主題であろう。この議論は、上で見てきたような、より大きな地図の中に位置づけた上での繊細な扱いが必要とされるように思われる。戦後の前衛の宣言として、センセーションを呼んだのは、サティと六人組を新しい精神の体現者として打ち出した、ジャン・コクトーの『雄鳥とアルルカン』(J. Cocteau 1918, *Le coq et*

l'arlequin : Notes autour de la musique) であり、そこで、コクトーは、正統性の起点をドビュッシーからサティに変え、六人組をその正統な後継者にすることを試みた。ドビュッシー、そして「印象主義」、そのロシア音楽趣味を攻撃し、「ドビュッシーはドイツ人の奇襲を迂回しようとしてロシア人の罠に落ちた」との挑発的な言葉で、「オペラ劇場からミュージックホール (= ジャズのもと) へ!」を宣言し、前世代との断絶、新しい出発を強調した。しかしその解釈にあたっては、バックグラウンドに、当時のフランス文化に特有であり、コクトーが好んだ挑発・炎上戦略があることを考慮する必要があるだろう。さらには、この文献は版、出版年等について研究上綿密な扱いが必要であり、たとえば、M. Haine の考証によれば (Haine 2014)、その出版は実際には1919年であり、この1年の違いには政治的な思惑が関与しているとともに、コクトーのドビュッシー評価は時間とともに大きく変化し、そこには常に戦略的な顧慮が見られる。

コクトーの論点は *Revue musicale* 誌などでも音楽評論家、作曲家によってソフィスティケートされた形で議論されていった。P. Landormy 1943, *La musique française après Debussy* は六人組の登場を「音楽革命」とし、ほとんどすべての記述を六人組の歴史的な正統性の擁護、それに基づくフランス音楽の優位性の主張にあてる。

しかし総体的には「新しい精神」の議論は、20年代半ばから、無調・複調の意義、優劣をめぐる議論、シェーンベルクの評価と六人組の各作曲家の評価の議論へとシフトし、議論は音楽語法の領域に限定され、そこでミュージックホールへという社会的側面の議論は後退することとなった。

第一次大戦がもたらしたものの中でも、恐らく最も大きなものは、戦勝がフランスを国際的音楽文化の中心の地位につけたこと、少なくともフランス人にそのような戦略を明確にとらせたことだろう。もともとパリを、国際的な音楽文化都市とすることによる覇権の戦略は1914年以前から明確に意識されていた。これは19世紀以来のフランスの文化伝統でもあった。ラヴェルらが、国民音楽協会を離れ独立音楽協会を1909年に設立したときの大義の一つは、国民音楽協会が外国人の会員を認めていないことだった。また、ロシアの音楽家との積極的なつながりでフランスの音楽文化は活性化した。ロシア五人組、ロシア・バレエ団の存在は切っても切り離せない。もちろんその背後には1894年の仏露同盟という政治の場の力学もあった。第一次世界大戦は、これらの動きを束ねる決定的な触媒となった。

上で触れた、R. Dumesnil の1946年の著作『両大戦間のフランス音楽』はその第2章「Cosmopolitisme et apports étrangers コスモポリタン主義と外国からの寄与」と題し (55)、両大戦間は他の時代にも増してコスモポリタン都市パリが花開いた時期であると、明確に記述する。

そこでは、国際都市として、敵国であったドイツの音楽を包摂する試みも行なわれた。レパートリーについてのドイツ音楽の人気は上述したとおりだが、新しい動きを伝えるのに、*Revue musicale* 1930年10月号では、A. Machabey がヒンデミットについての記事を書き、「ドイツ、オーストリア、フランスでも大部分の聴衆がどのように聴いてよいかとまどっているが、近いうちにバッハ、ベートーヴェン、ワーグナー、シュトラウスのようにわれわれに親しい存在となるだろう」との評価を与えている。また、同誌の1931年7・8月特別号は *Géographie musicale 1931 — Essai sur la situation de la musique en tous pays*. (『1931年の音楽地勢、すべての国の音楽についての試論』) と題され、ドイツ、ベルギー、フランス、イギリス、ハンガリー、イタリア、オランダ、北欧、ポーランド、ルーマニア、“ロシア楽派”、チェコ、アメリカ、ブラジルの音楽情勢、新しい楽派の傾向について紹介している。そしてこの中のドイツの項では「ドイツの作曲家は、世界の中でその地位を取り戻しつつあるだけでなく、バッハに時代を超越させたのと同じ本質的で真正な語法を少しずつ、もう一度築いていると言っても許されるだろう。」と述べられている。

楽壇の中での新しい言説の論戦の主要な場であった *Revue musicale* によって動きを追っていく限りにおいては、六人組とその支持をめぐる極端なアクションと言説の熱が収まるとともに、語法・方向の多様性を、外国音楽も含め、フランスの現代の音楽文化の特質であるという論調に回収する方向性が1930年ごろには支配的に

り、前衛をめぐる挑発戦は沈静化していくように見える。

論者の関心は30年代半ばから、経済・政治情勢の変化に伴う左右対立の顕在化、新メディアによる音楽聴取文化の変質のほうへ移り、語法の覇権を巡る議論は進展がないまま、第二次大戦勃発、そして占領時代の休戦を経て、新たな戦後へと持ち越されることになる。

6. 第二次世界大戦後：新しい音楽史認識の浸透と両大戦間の忘却

このように、両大戦間に形成されていたフランスの同時代の音楽を概観してくると、私たちが現在フランスの現代音楽についてイメージする、メシアン、ブーレーズといった作曲家、セリエリズムやその理論的發展形による前衛を正統とする音楽史的認識との間には大きな、切断や摩擦があるように思われる。この転換がいつどのように起ったかは、それ自体大きな主題であるが、戦後すぐの音楽史書を見ると、1945年から60年ごろまでの間は、後に支配的になる言説から見れば過渡期であり、現在の前衛はまだ一般的な正統性を得てはいなかった。1970年版の N. Dufourcq の *Musique française* (邦訳版、デュフルク『フランス音楽史』1972) において、1969年の日付を持つ「エピローグ 開幕か断絶か」では次のように述べられている (561 - 573)。

フランス音楽は、とつぜん襲いかかった危機のただなかに頭から突っ込んだ。1940年から1960年までのあいだのことである。危機は過ぎ去ったのだろうか。わからない。

[...]

フランスでは、二十世紀の最後の三分の一にはいったところで、音の芸術は、技術が女王のように君臨する時代に踏みこんでいる。

[...]

この《革命》—この《進展》とほとんど人はいわんばかりであるが—は、外国人(とりわけドイツの表現主義的な仲間)によって遠隔操作された。

[...]

激動の先駆者たちが、彼らの征服に力を得て伝統に通じる道をあらためてまた開くとき、フランス芸術が平衡をふたたび見いだすかどうかは、未来が語ってくれるだろう。

これがブーレーズやセリエズムについて向けられていることは明らかである。

1963年に出版された総合的な音楽史書 R. Manuel ed. 1963, *Histoire de la musique* の第2巻で、この時点の最新の現代の項目を扱う長い章は、G. Brelet によって「フランスにおける同時代音楽 *Musique contemporaine en France*」と題して書かれている (Brelet 1963: 1093-1275)。その中の最終節「デカダンスかルネサンスか *Décadence ou Renaissance*」(Brelet : 1266-1272) で、彼女は新しい技法(セリエリズム)に理解を示しながら、やはり矛盾を統合しかねているように見える。結局、最終的にセリエリズムの作曲家にもドビュッシーの精神があるというような修辞でフランス音楽の統一を図っている(1271)。しかし、切断や摩擦の問題は持ち越されたし、今も持ち越されているとしか言いようがないだろう。

1870年以降の音楽史の時代区分の中での連続性を持ちながら、第一次大戦のもたらした新しい状況の中で花開いた両大戦間のフランスの音楽は、音楽語法の進化や前衛の観点からは捉えきれない多様な潮流を抱えていた。戦後の前衛の視点から価値あるものとして選びとられたいくつかの流れだけに、この時代の音楽を還元するのは、その豊かさを忘却することだろう。そしてその豊かさをもう一度汲み取ることは、21世紀の音楽を考えていく上で重要なことであるように筆者には思われる。

六人組の一人として、短い間、「前衛」の一人でありながら、戦後の前衛の中で傍流に追いやられた、G. オー

リックは、1978年に再版された『雄鳥とアルルカン』に回顧的考察の長い序文を寄せた。そこで彼は、セリエリズムから電子音響音楽、ブーレーズ = シェローのパイロイトまで当時の様々な新しい音楽事象に冷めた目で距離を置きながら、最後に次のように述べている。それから40年余たった今私たちは、恐らくは彼がそう述べざるを得なかったときよりも、幸せな年にいるのは確かだろう。両大戦間の音楽の多様性に目を向けることは、とりこぼしてしまった幸せをもう一度取り戻しに行く試みに他ならない。

「もし芸術の真実というものがあるならそれはどこで始まるのだろうか。そのすべてを持っているのはどの巨匠か。パレストリーナなのか、バッハなのか、ワーグナーなのか。」アルクイユのよき師(サティ)は、1922年にそう語った。バッハ? ベルゴレージ? ...私はそれを突如思い出して、自問する。バッハの《ロ短調ミサ曲》は1733年に作曲された。ベルゴレージの《奥様女中》もそうだ。われわれのジャン=フィリップ・ラモールも同じ年に《イポリットとアリシー》を。つまり18世紀には、邪魔もされず、非難もされないで、これほど違った音楽を書くことが許されていたわけだ。1733年、何と幸せな年か! なんと幸せな18世紀! 最後の質問で、終わることにしよう。ラモール、ベルゴレージ、それともバッハ、そのうちの誰が自分を「同時代音楽の作曲家」と信じる権利があったとあなたは思いますか。

文献表

(本文献表は、「第一次世界大戦とフランス音楽」という主題を考える上での基本参考文献として、1914年より2014年までに出版・発表された資料を対象として、年代順に配列したものであり、本文中に直接引用していない文献も含んでいる。また、作成にあたって、文献表最後に挙げた成田麗奈氏の論文および、氏より提供された資料、音楽史書資料とその意義についての複数の論点についての助言が大きく参考となった。改めて感謝の意を表したい。)

- Séré, Octave (Jean Poueigh). 1915. *Musiciens français d'aujourd'hui*. Mercure de France.
- Baillaud, Benjamin, Emile Boutroux, and Joseph Chailley-Bert. 1916. *Un demi-siècle de civilisation française (1870-1915)*. Paris: Hachette et cie.
- Jean-Aubry, Georges. 1916. *La musique française d'aujourd'hui*. Paris: Perrin et cie.
- Lasserre, Pierre. 1917. *L'Esprit de la musique française. (De Rameau À L'Invasion Wagnérienne)*. Paris: Librairie Payot et Cie.
- Tiersot, Julien. 1918. *Un demi-siècle de musique française: Entre les deux guerres 1870-1917*. Paris: F. Alean.
- Cocteau, Jean. 1918. *Le coq et l'arlequin : Notes autour de la musique*. rééd. 2009, Stock.
- Coeuroy, André. 1922. *La Musique française moderne: Quinze musiciens français*. Paris: Delagrave.
- Jean-Aubry, Georges. 1922. *La musique et les nations*. Paris - Londres: J. & W. Chester ltd.: Éditions de la Sirène.
- Landormy, Paul. 1923. *Histoire de la musique*. Nouvelle éd., rev. et augm. Paris: P. Delaplane.
- Tiersot, Julien. 1924. *Un demi-siècle de musique française, 1870-1919*. 2. éd., rev. Paris: F. Alcan.
- Coeuroy, André. 1928. *Panorama de la musique contemporaine*. 6. éd. Paris: Kra.
- Dumesnil, René. 1930. *La musique contemporaine en France*. Paris: A. Colin.
- Coeuroy, André, 1941. *La musique et le peuple en France*. Paris: Stock Delamain et Boutelleau.
- Landormy, Paul. 1943. *La musique française après Debussy*. 10. éd. Paris: Gallimard.
- Landormy, Paul. 1943. *La musique française de Franck à Debussy*. Paris: Gallimard.
- Dumesnil, René. 1946. *La musique française en France entre les deux guerres*. Genève - Paris - Montréal: Editions du Milieu

du monde.

- Landormy, Paul. 1946. *Histoire de la musique*. Nouvelle éd. Paris: Mellottée.
- Manuel, Roland, ed. 1963. *Histoire de la musique*. vol 1. *Du XIII^e siècle à nos jours*. Paris: Gallimard.
- Brelet, Gisèle. 1963. "Musique contemporaine en France." In *Histoire de la musique*. vol. 1 edited by Rolad Manuel, 1093–1275. Paris: Gallimard.
- Jules, van Ackere. 1966. *L'âge d'or de la musique française (1870–1950)*. Bruxelles: Editions Meddens.
- Dufourcq, Norbert. 1970. *Musique française*. Paris: A. et J. Picard. [デュフルク, ノルベール 1972 『フランス音楽史』 遠山一行・平島正郎・戸口幸策 (訳) 東京:白水社]
- Nectoux, Jean-Michel. 1975. "Ravel/Fauré et les débuts de la Société Musicale Indépendante," *Revue de Musicologie*, 61 295–318.
- Deliege, Celestin. 1986. *Invention musicale et ideologies*. Paris: C. Bourgois.
- Fauquet, Joël-Marie. 1986. *Les sociétés de musique de chambre à Paris: De la restauration à 1870*. Paris: Aux Amateurs de livres.
- Hurard-Viltard, Eveline. 1989. "Jean Cocteau et la musique à travers *le coq et l'arlequin* (Du manuscrit à l'oeuvre publiée)." In *Jean Cocteau*, edited by Albert Mingelgrün, 85–100. Editions de l'Université de Bruxelles.
- Bailbé, Joseph Marc. 1991. *La Musique en France à l'époque romantique : 1830–1870*. Paris: Flammarion.
- Leveque, Jean-Jacques. 1992. *Les années folles, 1918–1939: Le triomphe de l'art moderne*. Paris: ACR Edition.
- Duchesneau, Michel. 1994. "Maurice Ravel et la Société Musicale Indépendante: 'Projet mirifique de concerts scandaleux'," *Revue de Musicologie*, 80 251–81.
- Duchesneau, Michel. 1996. "La musique française pendant la Guerre 1914–1918: Autour de la tentative de fusion de la Société Nationale de Musique et de la Société Musicale Indépendante," *Revue de Musicologie*, 82 123–53.
- Fauré, Michel. 1997. *Du néoclassicisme musical dans la France du premier XXe siècle*. Paris: Klincksieck.
- Caballero, Carlo. 1999. "Patriotism or Nationalism? Fauré and the Great War," *Journal of the American Musicological Society*, 52 593–625.
- Duchesneau, Michel. 1999. *L'avant-garde musicale et ses sociétés à Paris de 1871 à 1939*. Liège: Mardaga.
- Porcile, François. 1999. *La belle époque de la musique française : le temps de Maurice Ravel (1871–1940)*. Paris: Fayard.
- Mussat, Marie-Claire. 2001. "La réception de Schönberg en France avant la Seconde Guerre mondiale," *Revue de Musicologie*, 87 145–86.
- Nichols, Roger. 2003. *Harlequin Years: Music in Paris 1917–1929*. California: University of California Press.
- Becker, Jean-Jacques, ed. 2005. *Histoire culturelle de la Grande Guerre*. Paris: Armand Colin.
- Médicis, François de. 2005. "Darius Milhaud and the Debate on Polytonality in the French Press of the 1920s," *Music & Letters*, 86 573–91.
- Schor, Ralph. 2005. *La France dans la première guerre mondiale*. Malakoff: Armand Colin.
- Caron, Sylvain, François de Medicis, and Michel Duchesneau 2006. *Musique et modernité en France (1900–1945)*: Montréal: PU Montréal.
- Chaubet, François. 2006. *Histoire intellectuelle de l'entre-deux-guerres : Culture et politique*. Paris : Nouveau monde éditions.
- Fulcher, Jane. 2007. *The Composer as Intellectual: Music and Ideology in France 1914–1940*. Oxford: Oxford University Press.
- Segond-Genovesi, Charlotte. 2007. "1914–1918: l'activité musicale à l'épreuve de la guerre," *Revue de Musicologie*, 93 399–434.
- Kelly, Barbara L. 2008. *French Music, Culture, and National Identity, 1870–1939*. Rochester: University of Rochester Press.

- Audoin-Rouzeau, et al. 2009. *La Grande Guerre des musiciens*. Lyon: Symétrie.
- Caron, Sylvain. 2009. *Musique, art et religion dans l'entre-deux-guerres* Lyon: Symétrie.
- Chimènes, Myriam and Alexandra Laederich. 2013. *Regards sur Debussy*. Paris: Fayard.
- François-Sappey, Brigitte. 2013. *La musique en France depuis 1870*. Paris: Fayard.
- Kelly, Barbara L. 2013. *Music and Ultra-Modernism in France: A Fragile Consensus, 1913-1939*. Suffolk: Boydell Press.
- Haine, Malou. 2014. "Claude Debussy vu par Jean Cocteau", *La Revue Musicale OICRM* 2(1) 191-211.
- Hamer, Laura 2014. Review of *Music and Ultra-Modernism in France: A Fragile Consensus, 1913-1939*, by Barbara Kelly. *H-France Review*, 14 (158).
- Maindreville, et al. 2014. *La Grande Guerre en musique : Vie et création musicales en France pendant la Première Guerre mondiale*. Bruxelles: Peter Lang.
- 成田麗奈 2015 「1870-1939年に刊行されたフランスの音楽史書に関する基礎研究」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』15
9-32.